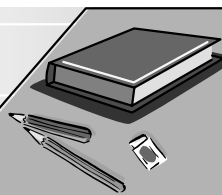


学生時代と図書館 65

— 本との出会いの場 —

長濱 拓磨



私と図書館との関わりは幸福な読書体験を持つ小学生時代から始まる。6年生の時、担任の先生が始めた月間読書ランキングで1位になったことから、トップの座を維持するために、学校の図書館だけでは物足りず市立図書館にも毎日通った。紆余曲折はあるものの中学や高校でも読書に没頭する時期を持つことが出来たため、日本文学を専門としたいという方向性が決まった。この頃は、図書館というと様々な分野の本があることよりも、自分の好きなシリーズや全集がそろっているのが魅力だった。

大学では教育学部の国語科を選んだ。文学部も考えたが、専門を生かす道は国語教師ぐらいしか思い浮かばなかったもので、それならば教育学部で教職を取りながら、余裕を持って他学部の関心のある授業を受講したかったためである。おかげで教育学部と文学部の2つの校舎を行き来することになった。

大学の図書館は中・高校の図書館と違い、圧倒的な蔵書数が魅力だった。開架図書もさることながら緊張感の漂う書庫で様々な資料と向き合うことは「大学生になった」という実感をもたらした。しかも私の通った大学では学部ごとに図書館があり、それぞれ特色を備えていた。最も大きいのが1, 2年次に全学部の学生が在籍する教養部であらゆる分野の蔵書が揃っていた。医学部や自然科学系の図書館は本を借りることに縁がなかったが、エアコンが快適だったので自習のために何度か利用した。文学部の図書館は専門書が多かったので、学部時代より大学院生になってから足しげく通うようになった。経済学部の図書館は学内で最も古く、これも院生になってからお世話になった。そして私の在籍していた教育学部の図書館は学内では小さいながらも全分野がそれなりに揃っており、しかも師範学校時代の古い蔵書の中に貴重な本が隠れていた。特に驚いたのは、中江兆民が日本で初めてルソーの『社会契約論』を紹介した『民約約解』（1882年）の現物があったことだ。100年ぶりに初めて貸し出しをしたのが自分であったことに不思議な感慨にとらわれた。

大学院に進学してからは何人かの作家の「参考文献目録」作成に関わったので、自分の大学だけでは物足りず大阪府立図書館や他大学の図書館も利用するようになった。その度に感じるのは、書庫に直接入れないことの不便さである。目録やパソコン検索で資料請求が出来るのはいいが、多くの資料の中から自分で探す楽しみは半減する。目的の資料を探すついでに意外な資料を発見する楽しみがなくなるからだ。やはり図書館の一番の魅力は自分の知識を広げる本や資料との出会いにあると私は思っている。

最後に学生時代ではないが、今も私が利用する韓国の国立国会図書館について紹介しておきたい。私は大学院を修了した後に韓国の大学で4年間教職に就いていたので、その頃から利用しているが、韓国の国立国会図書館は、外国人でもパスポートさえ見せれば気軽に入館できる。インターネットで検索ができるのは当然のことながら、論文資料もPDFファイルになっているものが多く日本にいても簡単に現物のコピーを手に入れることができる。場合によっては国会図書館内でのみプリントアウトできる資料もあるが、日本の国会図書館に比べるとはるかにPDFファイルは多い。そして何よりも開架資料が多いので、自分で現物を手に取り、手続きなしで自由に必要なコピーをすることもできる。その意味では私にとっては理想の図書館がここかもしれない。ただ日本の国立国会図書館に比べるとはるかに蔵書数が少ない。それだけは一つ残念である。

ながはま たくま（准教授・日本近代文学）